

『夜明け (08/07)』

夜明けに流れる
私の涙よ
胸の痛みか
消(きえ)えぬ思いか
頬を伝わり
落ちていく

何がそんなに
悲しいのか
何がそんなに
痛むのか
お前だけが
泣いている

零れた涙が
流れ落ち
胸のやるせの
哀れなる
泣いて流す
夜明けの夢か

『午後 (08/07)』

遠く野畑の広がり続き
その果ての緑が山々の連なり
空は高く青く澄み
白雲すらも浮かんでいない

ああああこの長閑さよ
ああああこの込み上げる心よ
ああああ生きている喜びよ
ああああこの安らぎよ

樹々の海原はけだるく
太陽は真上でギラギラと燃え
己(おの)が生きている苦惱が
目覚めて怒涛のごとく呵責に責める
死はいづくにぞ有る
自己の命を絶(た)てる人の勇気を
私は持ち合せていないのだ
死はいづくにぞ有るや

『独り (08/07)』

泣いている泣いている
客のタバコの煙が中で
客息の雑多な店内で
会話と器(うつわ)が飛び交う中で
泣いている泣いているその夜は

むせぶ泣く唄の響き
去り行く独りの孤独
たった独りたった独り
今夜もむせぶ泣く唄声
たった独りたった独り

泣いている泣いている
客の笑いが渦巻く店のなかで
人の夢の売と買いのなかで
人々が眠の微睡(まどろ)むなかで
泣いている泣いているその夜は

ピリー・ホリデーへ

『工事灯 (08/12)』

黄色い回転灯が
クツル・クツル・クツル
夜の暗黒が世界の中を
くるくる回っている
あれは警告灯の道しるべ

黄色の回転灯が
くるくると回っている
明るい白昼が世界の中を
くるくると回っている
あれは危険灯の道しるべ

クツル・クツル・クツルと
昼も夜も毎日毎日
クル・クル・クル・クル・クル
黄色い黄色の道しるべ
まわってまわって回っている

『花 (08/16)』

あわれなる
お前の心よ
何故にせつなく
痛むのだ
言葉に出せぬ
悲しみを
痛みで過ごす
哀れ私の心よ

生きてせつない
思いの数々
花一匁(はないちもんめ)
花一輪すら
咲いてこの世に
有るものを
咲かずにあわれ
お前の心よ

『漂へ (08/16)』

どこへ行けばいいの!
どこへ行けば生きられるの!

愛すらも喰われ
希望に見離されて

どこへ行けば逢えるの!
愛する人はどこにいるの!

愛すらも喰われ
希望に見離されて

私の生きられる場所はどこな
私の生きられる人はどこにいるの
私にも優しい生きが欲しい
優しく愛してくれる人が欲しい

世間を彷徨い歩いて
蔑(さげす)みされて
人々は私を
抱いてはくれなかった

愛すらも喰われ

希望に見離されて

どこへ行けば逢えるの！
愛する人はどこにいるの！

愛すらも喰われ
希望に見離されて

どこへ行けばいいの！
どこへ行けば生きられるの！

ピリー・ホリデーへ

『日陰 (08/20)』

陽の照りに出来た
日陰(ひかげ)溜まり
涼しくもあり
心地好くも有り
吹く風に我が想いを
馳せれば自ずと湧き
私は何も言うことなし

その樹木の葉の

ヒラヒラと陽に戯れ
風に揺れ遊びしを眺め
私は微睡(まどろ)み眠りにつく
瞑(つぶ)る瞼(まぶた)はほの痒く
身はおとぎの世界にありて
耳には小鳥たちの小聲

風がほほをなで
斑文様(まだらもんよう)が身を包む
堆肥(たいひ)が落葉(らくえつ)の路(みち)は優しく
敷(し)き占(し)めた宝(たから)の絨毯(じゅうたん)
紅色(こうじき)・黄色(おうじき)・茶色(ちじき)……
薄黄色(うすおうじき)・濃い真紅(こいまゐに)・淡い茶色(たんいちじき)
木漏れ陽(きもらいよう)に美しい

『灰色海原 (08/20)』

私の心と人生を
空(むな)しく沈(しず)ませる
灰色(はいいろ)の海原(うら)よ
寄(よ)せては返(かえ)し
何が楽しいのだ
この私(わたし)を苦しめて

何が嬉しいのだ

たまには真珠(まゆ)の
虹(にじ)を見せてくれても
いいじゃないか
黄金色(おうごんじき)に染(し)る夕(ゆふ)の
凧(たこ)の海原(うら)よ
生きる歓喜(かんぎ)に
満ちてもいいじゃないか

いつも灰色(はいいろ)に染(し)り
空(そら)の境目(さかいめ)から
寄(よ)せては却(かえ)って行く
大海原(おほうら)の波(なみ)よ
何が楽しくて寄(よ)せてくる
何が嬉(うれ)しくて却(かえ)って行く
この私(わたし)を苦しめて

『光(ひかり) (08/24)』

森(もり)の奥(おく)深(ふか)きへ
幾(いく)千年(せんねん)の眠(ね)りと
苔(こけ)の大地(だいち)へ

太陽の光は
差込んでいる
緑色の苔と静寂の
冷暗の地は
差込む一条の光に
七色の虹に輝き
キラリキラリと
流れる水の糸

湧き水を手にすくい
喉(のど)を潤(うる)おし
静寂の大気を吸う
生きて有ることを
神へ感謝する
この身は今となって
神の存在を信じるのみ
神に凡てをゆだね
神のみ心を信じるのみ
人で有ることの苦しみを
一条の光が優しく包む

『舌づ (08/24)』

火に包まれた家へ
飛込もうとしている母親

泣き喚(わめ)きながら
我が子を助けようと
何人もの男を振りほどこうと
その力は凄じい

火災に包まれた家は
柱が折れ倒れ
屋根がしだいに落ち始め
多くの見ている者の前で
焼け崩れていく

やがて母親を押さえていた
五人の男の力が弛(ゆる)む
その場で泣き崩れる母親
私はどうしても撮(と)れなかった
人間の叫びと涙の彼女に
カメラを向けることは出来なかった

『花火 (08/29)』

夜の空にあがって
花咲く大輪の
光り輝く色文様(もんよう)

煙の匂いに包まれて
いつしか夢を
見上げている

人の楽しい夢一輪
夜の空へ咲いて
儚(はかな)く消えました
人の哀しい夢一輪
夜の空に開いて
淡く消えました

みんなの夢を夜空へと
上げて咲かす大輪の
届(とど)けと開く色模様
見上げた先の天空で
黙ってあまたの星々は
キラキラ瞬(まばた)いている

『夜 (08/29)』

色とりどりの明るい
カラフルな世界は
様々な活動も終わって

漆黒(しつこく)の闇という
暗黒の世界に隠されて
一日の眠りにつく

人間が住む都会と言う
ネオンが海の不夜城は
闇に煌々(こうこう)と浮かび
鬱(うつ)ろな若者たちの
笑いと叫びの渦を巻く
哀しい哀しい人の海

朝日が射(さ)して
一日が始まるように
笑いと叫びの哀しみも
やがて日の光を迎える
大きな花を咲かせるのも
あなたなのだ!

End all 1994/08